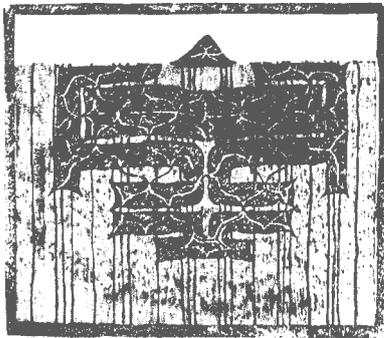


北方四島交流センター

— 11年前の愚痴と夢 —

亀谷 隆



「アットウシ」
オヒョウニレの皮からとれた繊維を織った布の上に、帯状の木綿布を置いて模様を縫い付けて作られ、模様は地域によって変化がある。
版画・谷口二郎（札幌）

★北方領土対策

ある居酒屋で、当時、北方領土対策に関わっている人と焼鳥を肴に酒を飲み交わしていた。

年号が変わった平成元年1月の頃の話である。「いつ返還されるか分からない領土返還運動は大変な苦勞があつて…」との愚痴めいた話を聞いた筆者は「先が分からないことに情熱を燃やすのは、恋愛と同じで楽しいと思いませんか」と慰めの言葉で返した。すると「恋愛は自分一人の情熱で済むが、領土返還は国民全体の情熱とするだけに、多様な運動が必要なんでね」との反応である。

そもそも北方領土問題は、南千島の帰属をめぐる日本とロシア間の問題で、昭和26年（1951）に日本と連合48国とで調印した「サンフランシスコ講和条約」で日本が放棄した千島の範囲が不明確であることに由来している。その後、日本とソ連との間の「日ソ共同宣言」で領土問題の検討が

決定し、昭和36年（1961）以来両国間で取り上げられ、日本は国後、択捉、歯舞、色丹の四島は歴史的にみて日本固有の領土であると主張し、ロシアは歯舞、色丹を除く千島問題は解決済と主張して対立が続いている。

★根室に交流の場

居酒屋の続きであるが、「これまで、領土返還運動の手段のひとつとして啓発ポスターを作ってきましたよね」と聞くと「うん、いろいろなデザインのを」との返事である。

確かに“返せ北方領土”とか“われわれの北方領土”とかの呼掛けをスローガンとして、返還意識の高まりを期待していた。で、「あの“返せ北方領土”というスローガンをロシア人はどう受け止めるでしょうかね」と話すと、「そうだなあ、言われてみれば、ロシア人にとっても、日本人にとってもあまり良い感じはしないだろうな」との返答であった。

ましてや日本語の日本文字表記ではなく、伝えたロシア人相手を読めるロシア語と文字での表記でなければ、自己満足な運動と思わざるを得ない。

そこで「日本人にとってもロシア人にとっても有益な事業はないだろうか？例えば、互いの生活や文化を理解する場となる施設の建設などは？」と提案したところ、「なるほど、根室にはロシア漁船の入港も多いから、交流する機会もあり、友好効果が期待できる。しかし、多大な経費が必要となるな」と首を傾げたので、「先が分かる事業を積み重ねる方が、同じ苦勞でも楽しいでしょう」と少し夢のある会話をした。

★根室市に建設を決定

居酒屋での夢ある話から5年を過ぎた平成6年（1994）、北海道北方領土対策本部から電話で「根室に交流施設を建設することになったので、建設指導をお願いしたい。ついては事務手続きなどの打合せの日時の都合について…」との連絡があった。

打合せに出向き、どのような構想かとの問いには「まだ、白紙の状態なので、実施に向けての手順などを教えてほしい」ということであった。

その後、検討委員会が発足し、関係機関や根室市などで建築や展示内容の検討を行った。

建設場所は、根室市街地より西部に位置した緑地が少ない風当たりが強い丘陵地で、天気の良い

日には国後島を見ることができるとのこと。

それだけに、建物の意匠を含めた各室の配置には、維持管理などを考慮した設計を要求し、数社による作品競技を行った。展示はその後にプロポーザルによって設計を決定した。

その頃、居酒屋で話をした人は、既に他の部所に異動していたことから、夢実現への進捗を時折報告した。

★四島の四季

交流施設には、ロシアの文化や日本の文化を紹介する室や、研修室、調理室などがあるが、なかでも最も面積の広いのが展示室である。展示室では日本とロシアとの歴史、道東と四島を含んだ地域の自然、そして、これまでの交流活動などを写真や実物、映像や模型などで示すことにした。

なかでも、多目的ホールでは、島全体の地形、海や火山、春夏秋冬の景色と植動物をダイナミックな大型映像と音響とで紹介することにした。

そのためには現地である四島に行って撮影をしなければならない。当然、日本固有の領土であるからビザを必要としないというのが日本の主張であるが、現状ではロシアがロシア領土と主張しているから困難であり、四島への渡航は日本とロシアとの協定によるビザなし渡航以外では機会がない。

そこで、ロシア側に撮影をお願いすれば可能だろうとの結論になり、ユジノサハリンスク市にあるロシア国営放送サハリン支局に依頼した。

そこで問題になったのは、四島の地形を上空から撮影する要求で、放送局は「専用の飛行機やヘリコプターを有していないから、軍のヘリコプターを使用するしか方法はないが、四島の空撮で燃料不足が懸念されるので、燃料を四つの島に運ぶことが必要となる」との意見である。さらに「これまでカメラマンは陸上でのニュース撮影は経験しているが、空中での撮影は未経験であると同時に、揺れを防止できる器材もない」との返答である。これを聞いた関係者からは「困った！困った！」の声しか出なかった。

困っただけでは済まされないので、すぐに関係者で対策会議を開いた結果、「陸部撮影で春夏秋冬を表現し、空撮は放送局側の努力に委ねよう」となった。

後日、放送局より短時間であるが空撮をしたと

の連絡を受け、届いたビデオテープを見たところ、冬に撮影した画面があった。おそらく軍が撮影したのではないかと思えた。

★ニ・ホ・ロとは

北方四島交流施設の名称を「北方四島交流センター」と改称し、さらに愛称を募集して、平成12年2月に開館した。

愛称は全国から応募されたなかから「ニ・ホ・ロ」という名が選ばれた。ニは日本、ホは北方、ロはロシアを指し、それぞれの頭文字の発音を組合わせたという。

11年前に焼鳥を肴に酒を飲んで愚痴めいたことを話していた人は、すでに関連団体の役員職となっており、愛称審査員の一人として加わっていた。

審査を終え、開館式までの間に「二人でご苦労さん会」をとの連絡があり、夢実現までの思い出話のなかで「審査した“ニホロ”という愛称は単純明快で良いだろう」と名付け親である誇りとも思える話し振りであった。

「そうですね、もともと根室という地名はアイヌ語で、樹木の繁茂する所“ニムオロ”が転化した呼名だし、ニムオロ、ネムロ、ニホロとも、発音から近い響きがある感じからすれば、親しまれますよ」と返答すると、「そうか、アイヌ語までは知らなかった」と話し終えると、「お女将さん、^{あつかん}熱燗2本！」と注文し「1本は君の夢、もう1本は俺の夢」と互いの夢を飲み干した。



profile

亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師（博物館学）、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎 たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。